
HERO'S HERO

ジンウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HERO・S HERO

【Nコード】

N5103F

【作者名】

ジンウ

【あらすじ】

今より少し未来の話。人類は”アタック”と呼ばれる異星人襲来の危機に晒されていた。この危機に、隠密の国際組織「IHO」が動き出す！無気力系美少女・李花と超気弱なIHO所属のヒーロー・敬矢は、果たして世界を救えるのか…？

「HERO・S HERO」

20XX年、某国某所某機関にて。

ピコーンピコーンと映画スクリーン並モニターに点滅する怪しい点々。

モニターのだ真ん中には球体があつて、その球体には「EARTH」と書かれている。そしてその点々どもは、EARTH 地球を囲む様に存在していて。

「な…何という事だ…!!」

その国の言葉でそういう意味となる言葉を、モニターを見ている者達は口々に呟いた。

そして一人、一際威厳のありそうなご老人が一步前に進み出てくる。点々達をじつと見つめると、ご老人は「アタック」じゃ…!!」と小さく呟いた。

「アタック」…?!博士、ではこれはやはり…!!」

「20年前にあったという、あの…?!」

にわかにはザワつき出す周り。博士、と呼ばれたご老人は重々しく頷く。

そしてバンツと机を叩くと、こう大声で言った。

「直ちに『IHO』の連中に連絡を取れ!!!」

『IHO』。

その単語を聞いた時、そこそこ歳喰ってる連中は「おお…!!」「ついに!」とか感嘆し、若い連中は「?」「何だそりゃ?」「と首を捻った。

仕方あるまい、と溜息をつき、博士は若い連中に向き直り口を開く。

「この世に悪が蔓延る時…奴らは隠密の内に動き出す…」

やたら芝居がかった口調。

若い連中は一瞬、博士も歳だからなあと頭の端で思った。

そして次の瞬間!!!

博士は机の上に片足を乗せ、アゴ外れるんじゃないかと周囲が危惧する程叫んだ!!!

「悪を許さぬ正義の味方!!!」『国際ヒーロー機関(International Hero Organization)』じゃッ
「!!!」

春の日差しは、とかく人のやる気を奪う。

事実、友人達と会話中であるにも拘らず

公立常和高校2年A組・
ジョウワ

白羽^{シラハ} 李花^{リカ}は、これ以上ない程強力な睡魔に襲われていた。

「り、李花…聞いてんの？」

返事がない事を心配した友人が、李花の顔を覗き込む。

…め、目に生気がない！

こりゃ駄目だと言わんばかりに、友人達は総動員で彼女を起こしにかかった。ある者は大声で呼びかけ、またある者は肩を掴んで揺すり。

…しかし、全く覚醒する気配がない…。

「李花あ〜…」

些か友人達も疲れが見えてきた数十回目の呼びかけ。

と、此処でようやく李花の目にうす〜〜〜く光が戻った。

「…ああ？」

第一声。思いつきり不機嫌な声である。

人の話の途中で船漕いどいてコイツ…！！と友人達は一斉に思ったとか。

「何asca、気持ちよく寝てたのに…」

「何その偉そうな態度?!」

「あー…いい天気ー…」

…聞いちゃいない。

李花は軽く伸びをすると、面倒そうに友人達に向き直った。

その動作を目で追い、思わずドキッとするクラスの男子面々

ま

あ、それは仕方ないだろう。

何せ李花は、稀に見る程の美少女さんなのだから。

セミロングのサラサラした茶髪、二重で切れ長の目、色白な肌…と書き連ねていけばキリがない程容姿が整っており、運動神経は抜群。成績もいい。

ただ1つ、神が彼女に与えなかったとすればそれは 女らしさ。今も足を組んでドツカリ椅子に座り、158cmと決して背の高い方ではないが友人達を見下ろす目つきで黙っている。何というふてぶてしさだろう。

「そ、そーいえば李花…アンタこの前、田上くんに告白されてたじゃん?」

「……田上え?」

「ホラ、あのバスケ部のさー!」

「あー…アレ。断った」

「えー…ッ?!」

何で?!と騒ぎ出す友人達。

「田上くん格好いいじゃん!!!バスケ部で1年の時からエースだったし!!!」

「顔も芸能人並だし!!!何でえ?!」

「あー…ウルサイ」

李花は顔を顰めて耳を塞いだ。

友人らが黙るのを待って、それから口を開く。

「クラスもかなり離れてて、話した事一度もないし。それなのに何でオマエは私を知ってんだって感じたし。私の何処をどうやって好きになったんだと。アイツなんぞよりまだチワワの方が恋愛対象と

して見れる」
「……………」

友人達は顔を見合わせて首を振った。

李花は自分が美少女として学校中、いやこの辺一帯中で名前が売れている（ついでに此処だけの話、携帯画像も出回っている）事など全く知らないのだ。

それにこの何処か男っぽさ漂う性格の所為もあり、寄ってくる男どもを面倒だと思っていない。

折角モテるのに、勿体無いなあ…と密かに溜息をついた友人。

その直後、ふと1つの机を指差した。

「朱島くん、また来てないね」

空席の、出席番号1番の席。

その席は2年になって以来、まだ誰も座っていないかった。

「朱島：アケジマ あー、朱島 ケイヤ 敬矢くん？そういえばまだ、一回も見えてないね」

「ずっとお休みなんだもん。先生も何も言わないし…何でだろ？」

「サボりか、入院でもしてんのかな」

まだ一度も見た事のないクラスメートの話題に花咲かせる友人達。それをチラリと横目で見やると、李花は徐に立ち上がった。え？と彼女達は李花を見上げる。

「何処行くの？今からお弁当食べるんでしょ？」

「食べるよ。川原だね」

昼からの授業はサボるから、宜しく。

李花の目は、明らかに友人達にそう語っていた…。

川原に寝転ぶと、視界一杯に青が広がった。
いいなあ、と李花は思う。

こうやって自由な時間を満喫するのは大好きだ。一昔前の田舎暮らしならば、もっとノンビリした生活がおくれたかもしれない…といつも考えている。

しかし、此処は現代の東京。更に自分は学生である。割と、自由が利かない事の方が多い。

時々視界の中に、空を飛ぶ小鳥達が入ってくる。それらをボンヤリと眺めながら、李花は一人の男子生徒を思い浮かべた。

朱島 敬矢。

彼の顔は、恐らく誰も口々に知らないのではないだろうか。

何故なら彼は、この2年間全く学校に来ていない。

それなのに教師陣は何も言わず、その上進級まで出来ていたりして…こんなのでは、生徒達に噂にするなど言う方が無理だ。

しかし教師はやたらと固く口を噤み、結局生徒達は首を傾げるしかない。

中学が同じだった奴もいないという事で、ますますその謎は深まり

顔が解らないから、特に。

が、李花は彼の顔を覚えていた。

入学式、一度だけ姿を見せた彼の姿を。

背がヒヨロツと高く、黒髪で気の弱そうな顔。確か、黒縁の眼鏡をかけていたと思う。気が弱いのかやたらと小さく縮こまっていて だからか、印象に残っていた。

全く不真面目そうには見えなかったが、一体どういう訳で学校に来ていないのだろうか？

1年の時から同じクラスであっただけに、彼は李花にとって唯一気になる存在であった。

「僕がレッドやるーっ」

「あ、じゃあ俺怪人の役やるから!」

何だか元気のいい声がする。

起き上がってみると、小学校低学年くらいの男の子達だった。

コイツらもさてはサボりか?こんな小さい内から…李花は感心した様子で見つめる。

で、何となく声をかけた。

「何やってんのー、少年達」

「ヒーローごっこ!」

即答で返事が返ってきた。

ヒーローごっこ…あー、懐かしい響き。李花は思わず微笑む。

「川に落ちない様に、気をつけてやんなよー」

「はい!」

いい子達だ(サボり疑惑は置いて)。そう思った後、李花は弁

当の入ったバッグを持って立ち上がった。
取り合えず自分が此処にいと、あの子達の邪魔になるだろう。
それに、寝たいからもう少し人目につかない場所の方がいい…そう、
橋の下辺り。

大きい川だから、ちょっと歩く事になる　　10分もないけど。

「じゃね」

子供達に手を振って、彼女は歩き出した。

よく晴れていて、草の上は心地よい。

群生したクローバーの上に腰を下ろすと、お弁当を取り出し膝の上に乗せた。

李花は7歳上の兄と2人暮らした。

物心ついた時から既に両親はおらず、その兄と共に親切な従姉妹の家出育った。そして兄が義務教育を終えると共にその家を出て、兄妹2人で生活を始めた。

勿論、これでも結構色々な苦労をしてきた。

しかし兄も李花も、それを然程苦には思っていない。寧ろかなり自由でイイなあと思ってるくらいだ。

…まあ、ただ1つ李花が苦に思う事と言えば、兄がかなり重度のシスコンという事で。

この弁当もまた、そんな兄が妹可愛さに毎日早起きして作っている

もの。

そろそろ食べるとしよう、そう思った李花が弁当を開けたその時！！

「……………んっ？」

川の中に、何か見えた。

灰色の丸っこい、何かの頭みたいなモノが…生物、だろうか。こっちに向かってくる。

……………何やら、微妙に懐かしいシルエットだ……………？

丸く愛らしい瞳。灰色のツルツとした身体。ピンピン跳ねたヒゲ。

そう…2000年代初期、東京の多摩川に現れ人々を騒がせたあの人気者……！！

「たっ…タマちゃんッ?!?!?!」

おいおい何年前の話だよタマちゃんて!!しかも此処、多摩川じゃないし!!有り得ねえ!!

李花の頭の中を、様々なツッコミが駆け巡った。

だが、その間にもタマちゃん(?)は可愛さを振り撒きながらスイツと泳いでやってくる。着ぐるみじゃないよな…とじっくり眺めてみるが、どうやら本物のアザラシの様に思えた。

やがてタマちゃん(?)は李花の目の前でピタリと止まった。

やたら人馴れしてないか?と李花が怪しむより先に、両ヒレを水上に出して顔の前でパタパタ振り始める。…もしかして、餌ねだってる?

「…何処の水族館から逃げてきたの、オマエ」

いくら何でも人馴れしすぎだ。

野生である事は有り得ないだろう…それとも本当にあのタマちゃん
で、何年もいる内に人に馴れてしまったのだろうか？

いや…アザラシの寿命って何年だっけ…？それにもう、TVとかで
見ないぞ？

怪しく思いついながらも、李花は自分の膝の上の弁当を眺めた。

おにぎり、卵焼き、ポテトサラダ、ウインナー、鮭の漬け込み焼き

…アザラシが食べそうなものとは、何だろう。

…やっぱり魚だろうか。李花は鮭を選んで摘み上げた。

途端に、水面をバシヤバシヤ叩いて喜び始めるタマちゃん(?)。

やっぱり魚好きらしい。

「ほれっ」

ぼん、と軽く投げてやる。するとタマちゃん(?)は少しだけ水面
からジャンプし、見事空中でキャッチして見せた。

そして鮭を銜えたまま岸に泳ぎ着き、ムシヤムシヤ食べ始める。

それを見て小さく笑うと、李花もウインナーを1つ口に入れた。ア
ザラシと一緒に弁当食べたなんて言ったら、友人達は一体どんな顔
をするだろう？

想像するだけで楽しくて、李花は微笑ましそうにタマちゃん(?)
を見やって声をかけた。

「美味しい？それとオマエ、小骨とか大丈夫？」

「あ、全然大丈夫っスよ。かなり美味いっス」

……………。

…？

……………！

バツと李花は飛び退いた。弾みで、膝の上に乗っていた弁当がバラける。

勿体無いと一瞬思ったが、そんな場合ではなかった。

今、喋ったぞコイツ。それもかなり流暢に。普通に。さもアザラシだって当然喋りますよと言わんばかりに。

冷静にツツコミのテロールが流れる。

しかしそんな頭の中とは裏腹に、李花の開いた口は塞がる事なく。

…そして当のタマちゃん(?)は、それを見てようやく…。

「…はっ、しまった!!!喋ってはいかんのだった!!!」

「遅いッ!!!」

思わず突っ込む李花。

慌てふためき、青ざめるタマちゃん(?)…いやもとい、謎の喋るアザラシ。

彼はワナワナと身体を震わせると、徐に水からあがって来た。その体系は、どう見たってアザラシだった。

ふ…とアザラシは寂しそうに笑う(アザラシのくせに、だ)。

「アンタみたいないい人に、俺の正体バレちまうだなんて…そして、始末しなきゃならないなんて…」

「……は、はあ…?」

李花は、極めて遠慮がちに首を傾げた。

そして目を見張った。

みるみる内に、アザラシの身体が肥大していくのが解る。そして牙

が伸びていく。

その上あるう事が首から下がボブ・サップみたいになっていく。仕舞いには、橋の下に頭がついてしまう程巨大化してしまった。

…いや、これはもう巨大化ではすまない。怪物化だ。

アザラシ（?!）は大きく腕を回すと、思いっきり地面を殴りつけた。

メキッと地面が変な音を立てる。その直後、半径10mくらいに震度6はあるう揺れが襲いかかった!!

「っ?!?!」

李花に驚く間も与えず、アザラシ（?!）は大声で吠えた。

「我が名はタマゴン!!!2002年の世から地球を狙っていた、サブマリン星よりの使者也ッ!!!」

……。

んな馬鹿な。っーか有り得ねえ。

あくまでツツコミは冷静な李花。しかし、その目はかなり見開かれている…。

驚いている、どころでは表現が追いつかない程に本っ当に驚いているのだ。

何だって?タマゴン?サブマリン星?...ダサイ名前だな。

…え、地球狙ってた?

いやいやいや。何スカいきなり。

TVゲームの世界?特撮の世界?...や、これ現実みたいだねえ。

あ、ていつかコイツさつき…「始末」って言った？…言ったね。

…始末…。

…。

…え、殺されるんすか?!?!!

「せめて…せめて苦しまぬ様、一撃で葬ってくれよう!」

いきなり言葉遣い変わったちゃってるよこのアザラシ星人。

それは置いといて、そんな勝手な事を言いながらタマゴンはにじり寄って来る。

…これ、もしかして凄くピンチ?

タマゴンが一步寄る度、李花は一步後ろに下がった。これは…逃げても、多分、無駄なのだろう…。

何故なら李花の後ろは緩やかとはいえ草の生えた斜面で、絶対的に速度は落ちるからだ。

50m走を7秒前半でコンスタントに走れる李花だが、流石に逃げ切れるとは思えなかった。

力強く拳を固めると、タマゴンは李花にそれを向けて構える。

自分、即死するのだろうか。

李花がそう思ったか思わなかったか、タマゴンの腕が勢いをつけて振られる!!

「…待って下さいッ!」

そんな声がした。そして大きな音も聞こえた。と同時に、李花は無

意識の内に閉じていた目を開く。

まず最初に映ったのは、見事宙を舞うタマゴンの姿。

次いで、そのタマゴンに飛び蹴りをかましたらしい謎の人物の影

さっきの声の主、だろうか。

シルエットからして、それは男性の様だ。

彼が着地する。

…助かった、のだろうか。この人物のおかげで。

李花は頭の端で、「ピンチの時に駆けつけてくれる正義の味方」を
思った。

取り敢えずお礼を言うべきだろう。そう思い、李花が彼に近寄る。

…が。

「じ、じじじごめんなさい！！すみません！！！」

正義の味方は、いきなりぺこぺここと倒れたタマゴンに向かって頭を
下げだした。

李花は目を丸くする。

…何処の世界に、敵に謝る正義の味方がいるんだ？

「あの…ちよっと？」

声をかける李花。

それにビクツと肩を震わせると、彼は恐る恐る振り返った。

彼の顔を正面から見た李花は、思わず「あ」と口が開いてしまう。

黒縁眼鏡。身長は高いが、それに反比例な童顔。

黒髪で、気の弱そうな目。

いかにも大人しそうな少年、といった感じのその風貌。

見覚えがあった。

「…朱島敬矢」

一回しか学校に姿を見せた事のない変わり者。
ポツリと呟いたその名前に、誰より彼自身がビビッたらしい。

「な…な、何で僕の名前を…っ」

「…イヤ、私アンタと同じクラスなんだけど。入学式の時、一回見たから」

「え…ええ？お、同じクラスって…」

今にも泣き出しそうだ。

見た目と中身、一緒だな…と李花は彼をまじまじと見つめた。
その時だ。

「敬矢あああ！！トドメを刺すのを忘れてはいかんぞおーッ！！」

馬鹿でかいそんな声がしたと思うと。

突如空から降ってきた人が、倒れたままのタマゴンにフライングエ
ルボーをかました！

「ガハア！！！！」

吐血するタマゴン。そしてガクリと頭をたれた。

…む、惨い…。

李花はその、空から降ってきて、そして何故かひよっとこのお面を
つけた男を見た。

男は李花につき立てた親指を向けると、やたら爽やかな口調で訊ね
てくる。

「やあ、美しいお嬢さん…怪我はなかったかな？」

「…はあ…大丈夫です、どうも…」

どうにも白けた返事しか返せない。

しかしそれを気にも留めない様子で笑うと、男はふと敬矢の方に顔を向け…

「あゝーッ！！！」

叫んだ。

「敬矢！！何故またお面をつけとらんのだっ！！ヒーローたる者、顔は隠さねば…ご近所に正体がバレてしまっただろうがッ！！」

「す、すみません…！でも、…そのお面はあまりにも…！！」

「ヒーローの心得その1を忘れたかッ！！その1、ヒーローとは正体不明であるべし！！はい復唱！！」

「ひ…ヒーローとは、正体ふめっ…」

「声が小さいい！！！」

…。

ヒーロー、だつて？

我が耳を疑う、とまではいかなかったが…李花は呆然と目の前の二人の遣り取りを見つめた。

まるっきりの嘘だとは思えない。実際タマゴンなんて怪物を見た訳だし、敬矢はそれを簡単に倒してしまったし。

しかしあまりに突拍子ない…。

…。

「時に敬矢よ！先程あのお嬢さんと何か話していたな？」

「あ…ハイ。あの、その…高校の、クラスメートらしくて…っ」

「何イ?!」

あ、何か自分の事言われてる。

そうボンヤリと思っっている李花の方を振り向くと、「本当かお嬢さん!」と男は叫んだ。

「ハア。そうです、公立常和高校2年A組、白羽李花と申します」

混乱している所為なのか、やたら丁寧に自己紹介してしまった。…まあ、損になる訳でもないから別にいいのだが。

男は「なんと…」と呟くと、暫く考え込んだ。隣で、敬矢が不安そうに見ている。

やがて、男はボンと手を打った。そして敬矢に言う。

「知られてしまったものは仕方ない。それに、偶然にも初めて助けた相手がクラスメートとは…これも何かの縁だろう!」

「は…はあ…?」

クルリ。

男は素早く李花を振り返った。

ビシッ。

李花を指差す。

「白羽さん…だったね。君は、口が堅い方かい?」

「…まあ、どつちかというところ…(説明するのが面倒なだけだけど)」「そうか…ならば、問題はない!」

叫び、男は付けていたひよつとこのお面を耑り取って放り投げた。

カランと音をたて、お面が地面に落ちる。

男の素顔は、凜々しい目元と爽やかな笑顔　　いかにも特撮ものの

ヒーロー、といった顔立ちだ。

年齢的には20代後半から30代…といった所だろう。

顔だちが少し敬矢と似ているから、兄弟か親戚だろうか。李花がその想像していると、男はニツと笑って更に叫んだ。

「私は朱島敬矢の父、朱島アケジマ 誠豪セイゴウ38歳！！…白羽さん、君に今から全てを打ち明けよう！」

…わ、若作りだ。

それが、展開の速さに戸惑いながらも李花が何とか呟けた一言だった。

「…IHO?」

「そう。正式名称は国際ヒーロー機関、インターナショナル・ヒーロー・オルガニゼーションの略称。世間一般にはその存在を明かされていない、隠密機関さ」

「朱島家は、代々その一員なんです」

そう言ってニツコリ笑う黒髪ウェーブロングヘア美人、敬矢の母である友美ユミ 38歳 の顔を見ながら、李花は敬矢はどっちかという母親似なんだなと思った。

広い和室、四つの湯呑みから漂う湯気がふわふわしている。

李花が連れて来られた朱島家はとても広く、正義の味方の家というよりは何処ぞの社長宅の様で。

始めは結構戸惑っていた李花だったが、今はだいぶ慣れて彼らの説明を大人しく聞いているのだった。

「…一体ソレって、どーいう機関なんですか？」

「うん、まあ…言葉の通りさ。でも、詳しく話そうと思えば長くなるんだけども」

残りのお茶を一気に飲み干すと、誠豪は黙ったまま小さくなっていく敬矢の背を叩いた。

「ホラ、敬矢。復習を兼ねてお前が説明だ！」

「えっ…あ、ハイ…」

おずおずと李花を見て、敬矢はボソボソと説明し出す。
…まるで捨て犬の様な目だ。

「…えっと、その…白羽さん、は、異星人って…解ります、よね？」

「李花でいいって。…うん、解る。宇宙人って奴っしょ」

「は、ハイ…。えっと…で…さっきの、怪物。あれも、その一部…なんです」

「うん。…そーいえば言ってたね、海友星よりの使者とか何とか。

イメージ違うな、宇宙人…」

「それで…その。数十年に一回、その異星人達が、一斉に地球の各国首都を襲い出す時期があるんです。理由は、よく解ってないんですけど…これをその手の関係者の間では、”アタック”と呼びます…」

アタック。

何となく李花はバレーボールを思い浮かべたが、まあそんな事は置いといて、それは大変だ。

つまり、推理すれば今まさにその”アタック”が来ているということではないか。

「アタックは、平安時代よりも遙かに前から存在したと言われているますわ」

友美が口を開く。

「その為、昔の人々は様々な策を取りました。日本では都を移したり、陰陽師を雇って結界を張ったり……。ですが、第二次世界大戦を経て世界が徐々に1つになり出すと、人々は互いに協力し合って”アタック”について考え出したのです」

「そして辿り着いた結論が：IHOさ！！」

いきなり立ち上がる誠豪。同時に、机がガタンと揺れた。
：お茶が零れる。李花は慌てて自分の湯呑みを押さえた。

「異星人達が強力な力を持つのなら、こちらもそれに対抗しうるだけの力を持つ人間を育てればいい！NASAと共同開発で生み出した特殊技術を駆使してなッ！！そうして生まれたのが、正しく現代のヒーロー達という訳だ！！」
「……………」

李花は空返事のように頷いた。

何だか、物凄く壮大な話を聞かされている気がする。

NASAと共同開発？

現代のヒーロー…？

「前回のアタックは、今から20年ほど前でした」

ポツリ、と友美が呟く。いつの間にか、誠豪はちゃんと座っていた。

「その時前線で日本を守る為戦っていたのが、この人…誠豪です。私は、その助手でしたわ」

「……………」

という事は、こいつヒーローだったのか。

こんな変人が。

李花は世の中そういうもんなのだろうか、と密かに思った。

「そして…今、アタックはまた訪れようとしています」

やっぱり。

さっきのタマゴンが、その先駆けなのだろう。つまり、これからあいつた輩が沢山現れるという訳だ。

うわ面倒臭え、と李花が美少女らしからぬ事を思った瞬間！！

「心配御無用！！今度は我が息子、敬矢が敵を討つツ！！！！」

自信満々な誠豪。

…李花は、チラリと敬矢を見た。

……………。

顔面蒼白なんですけど、彼。

「……………え…えと…その…」

「あっはっはっは！！ま、後は若い者同士積もる話もあるだろうし…じゃ我々は退散しようか友美！」

「ええそうね、あなた！」

言うのが早いのか、誠豪は素早く奥の襖を開けて引っ込んだ。

…ちょっと待ってくれ。何だ、それは。それじゃまるでお見合いだろうが。

大体、何で私はこんな所でこんな話を聞かされてるんだろうか。李花の思考はまたもやツツコミで一杯である。…と、そこへ友美が去り際にそつと耳打ちしてきた。

「あの子…敬矢には、貴方みたいな方が必要なんです…」

驚いて見返した時には、既に友美も奥に引っ込んでいた。流石ヒーローの妻、素早い。

自分みたいな人間が必要…とは、どういう意味だろう。

李花は不思議に思いながら、取り敢えず敬矢を振り返った。

…相変わらず、顔は青い。更にほぼ初対面の人間と二人つきりにされた所為なのか、マトモに顔を上げる事すら出来ない様だ。

本来それは女である自分がするべき反応なんだろうなあ…と思いいながらも、李花はまず話しかける。

「ね、敬矢でいいかな。ケーヤ。オーケー？」

「…え、あ…はい…どうぞ…ッ」

「……………」

李花は心の中で、そつと溜息をついた。

ヒーローってこういうモンでいいのか？そりゃ、確かに強いは強いみたいだが…。

ああそつだ、そう言えば。

向かい合わせに座っている状態からちょっと乗り出し、李花は思っていた事を次々口にした。

「さつきさ、NASAと共同開発したチカラがどーのこーの言ってたっしょ？じゃアレか、キミは改造されてんの？」

「え…い、一応…少し…」

「成る程…あ、それでさっきの怪人、蹴り倒す程の馬鹿力があつた訳。じゃ変身したりは？」

「…しません…。はい…」

「ふーん。だからお面か…でも、あのひょつとこのお面は止めた方がいいな格好悪い」

「……………僕も、思い、ます…」

「でしょ？…ってかさ」

一度、言葉を切つてジッと敬矢を見つめる。

「キミ、氣イ弱いな…」

ビクーン！！！！

「ごっ…ごっごっごめんなさいッ！！すみませんっ！！！！」

「えっ…イヤ、何で泣く…」

「すみませんすみませんすみませんすみ（中略）すみませんッ！！！！」

「お、落ち着けケーヤ」

いきなり慌てふためき、泣き出してしまった敬矢。

李花も李花で慌ててしまつて、彼の頭をひらすらよしよしと撫で続けた…一体、何をしてるのやら。

どうやら相当に気が小さいらしい。

だからさっき、タマゴンを蹴り倒しておきながらへこへこ謝つていたのだ。

あれだけ強いのに、全く妙な話である。

暫くして、落ち着いてきたらしい敬矢の頭から手を離し、李花は訊ねた。

「ひょっとしてキミ、怪人と戦うの怖いんじゃない？」

「……………」

「図星か…。じゃ、イヤって言えばよかったじゃん。跡継ぎなんて断ればさ。怖いのは、しょーがないし」

「い…いえ…」

オドオドしながらも、此処で敬矢はどうやら、「自分の意思」らしきものを語り出す。

「…ぼ、僕…小さい頃から、父さんに色々昔話聞いてて…武勇伝、とか。ずっと、憧れてたんです。…ヒーロー、っていうの」

「えーと…うん、憧れ、ね…」

アレにか…？

果たして憧れるか？野郎、都合のいいように巧みに語ってたんじゃないだろうな。

思わずそう勘繰ってしまったが、取り敢えず「それで？」と続きを促す。

敬矢は小さく頷くと、チラリと上目で李花を見た。

「だから…ぼ、僕も…そう、なりたいんです…。父さんの様な、ヒーローに…」

言うと、すぐに目を伏せる。

「…成る程…ね…」

呟いて、李花はすっかり冷めてしまったお茶に初めて口をつけた。苦っ、とぼやきながら敬矢を見やり、密かに思う。

…いや、ああはならなくていいと思うぞ、少年。

「じゃ、どうもお邪魔しました」

「いえ…是非またいらしてね！」

ニツコリ微笑む友美と誠豪に見送られ、李花は夕方四時半頃に朱鳥家を出た。

隣には、恥ずかしそうに顔を下に向けている敬矢…誠豪が「男たる者、女性を家まで送っていく事は義務」などとぬかしやがった為である。

二人は川原沿いをゆっくり歩いた。

太陽が夕日らしい色になって、西の空にボンヤリ輝いている。

…会話が欲しい。

李花は少し後ろを歩く敬矢を振り返って、「ねえ」と声をかけた。

「は…はい、何でしょう…」

「あのさ、何で今までガツコ来なかった訳？何か忙しかった？」

「あ…えっと…はい。ずっと、鍛えたり…」改造”に慣れる為の訓練をしたり…してました…。でも、もうこれから先は実践のみになるので…学校には、行けます…」

「へえ、そりゃ良かったね？」

「は、い…。IHOは、各国の政府に当然通じているので…出席日数や成績なんかは気にしなくても、進級や進学の保障はされています

けど……」

「あー……そうだろうね。いつ怪人出るとも解らないんじゃないじゃ、勉強マトモに集中出来ないし」

「……………。あの、り、…李花…さん」

”李花”の所だけやたら小さく消え入りそうな声で、敬矢が唐突に呼んできた。

ひよいと視線を上げ、改めて敬矢の顔を見る李花。

「何？」

「えっ…と、その…あの…」

言い難そうにモゴモゴ口籠りながら、敬矢はチラチラ李花を見る。ややあつて、ようやく口を開いた。

「…り、李花さんは…僕や、父さん達のこと…へ、変な奴らって、思わないんですか…？」

立ち止まる。

少しだけの間を置いて、李花はキツパリと言いつつ放った。

「思ったけど」

「…!」

何やらショックを受けてしまった様子の敬矢。李花は目を瞬かせる。マズイ事言っただか、何か？

「敬矢？」

「い…いえ、何でも…ないです…」

敬矢的には、例え嘘だろうと「思ってない」という答えを期待していたのだろう。

だが、李花の思考回路は一般のそれとはあまりに違っていて…というか、あまりに大雑把すぎて。

落ち込んだ面持ちの敬矢に、一言こう言った。

「変でいいじゃん。羨ましいよ」

「…え…」

意外な言葉。

目を見開いている敬矢。対する李花は、ケロッとした相変わらずの表情で。

「人つてさ、結局同じ奴なんていないっしょ。一人ひとり違う。その違いが、魅力的なんだし」

「……………」

「それに、他人と全っ然違うレール走ってる奴の方が生き生きして見えるなあって。日々なーんもなく平らに生きてると、余計にそう思う訳」

「…李花さん…」

「だからさ。ちょっと羨ましいんだ、敬矢が」

うん、と李花は一人で頷いた。

これは この意見は、別に李花が実は聖女のような澄んだ御心の持ち主で何のかんの…とかいう所から出た訳ではない。

只単に、人一倍…その、自由人で常識がないだけなのだ。

まあこの場合の常識というのは、世間一般に蔓延しがちな「自分とは違うものをおかしいとする知識」の事なのだが。

それに対し、敬矢はどこか呆けた様にポカんと李花の顔を見つめていた。何だか、不思議そうな表情。

しかし、二、三秒の後　ほんの少し、微笑んだ。
それは、李花が初めて見る彼の笑顔で。

「…敬矢さあ」

じっとその顔を見たまま、深く考えず、李花は自分も笑顔を見せて言う。

「何か、可愛い。こーいう弟、欲しかったな」

「！！！！」

途端に、プシューとかいう擬音が聞こえてきそうなくらいの勢いで急に敬矢が真っ赤になった。

わたわたと慌てた様に腕を振り、口をパクパクさせている。

どーした、と李花が首を傾げる動作で訊ねると、敬矢はしどろもどろになりながら何とか口を開いた。

「な…ななな、何でもないです…！！！！」

「…そー？」

…皆さん、もうお気づきだろう。

初めて言われるような言葉に、美少女の笑顔。

そう、敬矢は一瞬で”恋”を覚えたのである…。

うわぁベタな、というツツコミはどうかしないで頂きたい。ベッタベタな展開は、青少年期に1つは必要なものだ。

…とまあ、そんな事は置いておいて。

とにかく、そんなこんなで急に初恋を覚えた敬矢の心拍数は急上昇。自分の心臓の音がハッキリ聞こえるという、初めての大舞台に立つ新人歌手みたいな状況に陥っていた。

が、まあお約束に当の李花は全く気付かず。
あーそういえば、此処ってさっき敬矢がタマゴン倒したトコだ。あの死体、誠豪さんあたりが処理したのかな。
…などと、全くもって違う事を考えていたりした。

……………と。

「ん？」

「……………？」

李花と敬矢は、二人して同時に地面を見た。

何の変哲もない、アスファルトの地面。少し視線をスライドさせれば、背の高い雑草一杯の川原。

二人は一体、何に反応したのか？

その答えは 微かな、振動だった。

大型トラックが、ちよつと古い家の前を通った時。皆が激しくバスケなんかをやってる体育館の床に座った時。

震度にして2程度…そんな、微振動。

「何だよコレ…地震かね？」

「…え、と…いや、あの、もしかして…コレは…」

何かに気付いたらしい敬矢が、何かを言いかけた。

しかし、その言葉が最後まで言い終えられる事はなく。

ビーン。

足元のアスファルトが、嫌に張り詰めた響きを立てた。

二人は、揃って足元を見下ろす。…ビーンビーン、と何回も響く。ピシ。

…ヒビが入った。

おお…？李花は目を瞬かせる。

何だコレ。何でヒビ入ってんの。私ら、そんなに重かったか…？
そう考えている内に、今度はビシッと亀裂が入った。

あ…何か、ヤバそうだ。

「…っ危ないですっ！！」

敬矢が叫んで、こっちに手を伸ばしてきたのが見えた。

と思っただら次の瞬間には、敬矢は李花を抱えてその場から数メートル飛び退いていて。

元々李花達のいたアスファルトは轟音と共に砕け散り、凄まじい土煙が立っている。

その土煙の向こうに何やらデカイ影が見えた気がして、李花は目を細めた。

丸い頭のライン。物凄くゴツそうな、巨大な体。

…何か見覚えあるねえ。

いや何かどころじゃないですな。うん、ついさっき見たよ。

ほら、アレだよアレ。

…。

土煙が晴れる。

……………あれえっ、アザラシ星人？！！

「フフフフ…避けるとは、中々やりおるな…」

アザラシ星人…基、さっき死んだ筈のタマゴンは、低く渋い声でそう言った。

いや、中々やるというか何というか…随分と派手な再登場だなオイ。李花は心の中でゴツソリとツッコむ。というか、何で生き返ってますかね？

「フツ、驚いている様だな…まあ無理もなかるう！」

タマゴンはズンツと一步前に踏み出してきた。

何故か無意味にボディビルダーの様な筋肉を誇示するポーズを取り、声高らかに言う。

「私はウタゴン！！貴様らだな、我が弟を殺したのはッ！！」

……。

あー…お兄様であらせられましたか。

そっぴいばいたねえ、ウタちゃんつてのも確か。

最早驚いてあげる気力すらない李花。

その思考回路も、随分と投げやりになりつつある…。

が、ふと敬矢を見上げると、どうやら彼はそんな場合ではないらしい。

家で見た時と同じ様に、顔面蒼白になっているのだ。

「おーい…ケーヤ、大丈夫？」

「え…あ…う、は…はい…っ」

「……………」

…駄目だ。

すっかり怯えきってしまったている。

多分ウタゴンは敬矢と戦いに来たのだらうし、ヒーローの宿命とやらを考えれば敬矢も戦わなくてはならないのだらうが　これでは、

勝つどころかまともに戦えもしないだろう。
心配だ。

そんな李花を尻目に、ウタゴンは敬矢をジロリと睨みつけて唸った。

「貴様か…我が弟を葬ったのは…」

「…っ、え…あ…」

「ふん、貧弱そうなた見た目の割にやるらしいな。貴様、何者だ?!」

宇宙人のくせに、やたら日本の時代がかった台詞のウタゴン。

しかし敬矢はそれに答える事も出来ず。

仕方がないので、代わって李花が口を開く事にした。

「いたってフツの生活を望んでる、いち高校生っスよアザラシ星人さん」

「なっ、何イ?!! 貴様、私をアザラシなんていう下等生物と一緒にするなッ!!!」

「……（違っつもりかよ）……」

肩を竦めると、李花は敬矢を見やった。

相変わらず青い顔で震えている。

…こりゃ絶対無理だわ。

李花はまたウタゴンの視線が敬矢に移った隙に、砕け散ったアスファルトの欠片を幾つか拾った。

後ろ手にそれを握り締め、一歩近寄る。

それに気付く由もなく、ウタゴンは敬矢に戦いを迫っていた。

「…まあ貴様が何者かなどどうでもいい話だ!! 志半ばに散った弟の仇…さあ戦え、この私とッ!!」

…今だ。

叫ぶウタゴンの顔面に、狙いを定める。

中学の頃、李花は頼まれてソフトボール部の練習試合に出場した事が一度だけあった。しかも、ピッチャーで。

その時ルールをよく聞いていなかった上に折角の休日を潰されて苛々していた李花は、あるう事が初登板で時速110kmのオーバースローをミットにぶち込んだのだ。

女子中学生でそれは有り得ない気がするが、まあ…李花だから仕方ない(説明になっていないが、その時その場にいた大半の人間は何故かそう思い納得した)。

とにかく、その時の勢い。

いや、更にそれを越える時速115kmのアスファルト弾が、オーバースローでウタゴンの顔面に放たれた！

「グボオ!!!」

ウタゴンの悲鳴と同時に、李花は立ち尽くす敬矢の手を引いてダッシュした。

高校2年時のスポーツ測定、李花の50メートル走タイムは7秒02。時速に直せば時速25.6キロメートル。キツチリと制限速度を守って走っている単車になら追いつける速度である。

敬矢を引っ張っているとはいえその速度は大したもので、グングンとウタゴンが見えなくなっていく。

数百メートル走ったところで、運よく目についた木製の小屋の中に潜り込んだ。

扉を閉め、見つかった時は恐らく無駄だろうが一応門をかける。

暫く黙って外の音に耳をすませ、ウタゴンの足音や声が聞こえてこない事を確認して ようやく、李花は息を吐いた。

「…追ってきてないみたいだね。よっぽどアレ痛かったのかな」

「……………」

「ま、暫く隠れてよっか」

そう言つて肩を竦め、床に座り込んでいる敬矢を振り返る。返事が返つてこず、李花は首を傾げた。

…約5メートル四方の小屋の中、暗かつたのでよく解らなかつたが、どうも敬矢の様子がおかしいと気付く。

黙つたまま下を向いている敬矢の隣に座ると、李花はその顔を覗き込んだ。

「…どーした、ケーヤ」

「……………」

「折角日本にや言論の自由があるんだぞ。ホラ、言つてみなさい」

微妙にズレた李花の言葉に、敬矢がゆっくりと顔を上げた。

何だか今までに増して、泣きそうな顔である。そんなにあのアザラシ星人が怖かつたのだらうかと李花は思ったが、同時にそれとは何か違う感じがした。

「…僕、は…」

小さな声で、敬矢が口を開く。

「情けないです。敵が出たのに、戦うどころかまともに相手の姿すら見れなくて。おまけに、李花さんに迷惑かけてしまつて…」

「…や、別に大して迷惑じゃ…」

否定しようとした李花を首を振つて遮り、敬矢はまた下を向いた。右手を軽く握り締め、それに目を落とす。

「…折角人を助ける事が出来る力があるのに、僕はそれを無駄にし

てるだけなんです。戦わなきゃって思うのに、どうしても怖くてそれが出来ないんです。…こんなんじゃ、とても父さんみたいなヒーローになんて…なれません…」

…いやいやいや、ならなくてもいいから。あんなのには。

心の中李花はそう思ったが、今はそんな事を口にしていい雰囲気ではない。取り敢えず、李花は黙って聞いた。

敬矢は続ける。

「無理だなんて、思いたくないし…諦めたくはないんです。だけど僕は、いつになっても怪我する事や死ぬ事が怖くて…だから、敵に立ち向かっていく事が出来なくて。…本当に、情けないです…」

言い終わり、敬矢は膝を抱えて俯いてしまった。

…さっきの泣きそうな顔は、恐怖ではなくて自己嫌悪だったのだ。思い、李花は一人頷いた。

さて、普通なら此処で重…しい沈黙が訪れるか…「そんな事ないよ!」とキラキラ少女漫画モードに突入する所だが…。

しかし、李花はどちらも選ばなかった。

素早く手を伸ばして敬矢の頭を掴み、やや乱暴に無理矢理顔を上げさせたのだ。

啞然とする敬矢としっかり目を合わせると、李花は言った。

「ヒーローが、怪我や死を覚悟してどーすんのさ?」

「…え…ええ…?」

意外すぎるお言葉。敬矢は目を瞬かせた。

李花はべちべちと敬矢の頬を叩きながら、自論を語り出す。

「ヒーローってのはさ、最後まで世界や人を守るモンでしょ?そい

つが死んだり怪我したりして戦えなくなったら、一体誰が世界を守る訳よ。途中で投げ出すなんて無責任もいイトコだっつ。解る？ ヒーローたる者、死を恐れなきゃなんないの」

「え…あ、…はあ…」

「…大体、死ぬのとか怪我するのとかが怖くないなんて言う奴に命守って貰いたくないね。怪我や死ぬ事への怖さを良く解ってる君は、ちゃんとヒーローしてるよ」

「……………で、でも…」

「まあだ言うか」

敬矢の頭を掴んでいる手に力を込めて、李花は今度は睨みを利かせながら言う。

「諦めたくないって、自分で言ったるケーヤ。なのに結論出そうとするんじゃないよ。誠豪サンみたいなヒーローに、なるんだろ？」

「…はい…そう、です…」

「ホラ、だったらそんなへこむな。あの人はまずへこまないっしょ。そこだけは、見習っていい」

そこだけは、という所に妙に力を込めて言うと、李花はニッと笑って見せた。

暗く見えないかもしれないが、まあとにかく。

そして掴んでいた頭を開放し、代わりに軽く小突いてやる。

「自信持ってけ、ケーヤ。キミは必ずヒーローになれるって、私が保証してやるからさ」

「え…え？」

「乙女の期待を背負ったからには、責任重大だからね？」

自分で言っていて、似合わないとは思った（特に乙女の辺り）。

だけど、どうしても言っておげたかったのだ。李花は敬矢の返事を待って、彼を見つめた。

2、3秒の間。

ようやく敬矢が、「本当に…」と口を開いた。

自力で顔を上げて、微妙にまだ泣きそうな表情を李花に向ける。

「僕、ヒーローになれるって…思いますか？」

「うん」

「こんな風に臆病で、情けなくても？」

「うん」

「…僕は…」

泣きそうだった敬矢の顔が、刹那歪んだ。

一瞬目を丸くする李花の目前に、ポタポタと涙が落ちる。敬矢はその涙を拭う事もせず、言った。

「情けなくても、弱くても、僕…皆を、大切な人を、守りたいんです…！」

「…」

言った後、ゴシゴシと目元を擦る敬矢。

その姿を見つめながら、李花は知らず微笑んでいた。

何処までも真っ直ぐだな、少年。

そっと、敬矢に向かって手を伸ばした。今度は頭を掴むんじゃないで、撫でてやる為に。

ぐしゃっと思いつきり一撫でしてやった後、李花は大きく頷いて見せた。

「ダイジョーブ、出来るよケーヤ」

「…李花さん」

「キミの実力は私が知ってるよ。私は、キミが助けた第一号なんだから」

ビシリ、自分を指差す李花。

「その私が保証すんの。キミがヒーローになれない訳、ないでしょ？」

李花がそう言っ胸を張ってみせると、敬矢は少しの間じっと此方を見つめて それから、ゆっくりと頷いた。

そして泣き顔のまま、笑う。

こんな状況下だが、その笑顔を見た李花は何処か心温まる想いで。

「……いや本当に、”こんな状況下”で…。」

「此処かぁー！ーッ！ー！！！」

扉の向こうから、折角の雰囲気をつち壊す低音ボイスが響いた。

…誰の声って、そりゃあ。

アレですよ、さっきからしつこい、アザラシブラザーのお兄様ですよ。

ああ、来やがった…李花はガクリと肩を落とす。正直な話、ウザいと思った。

しかしどうやら、敬矢は別の心配をした様で…。

「李花さんっ…扉から離れて!!！」

言葉と同時に、敬矢は李花の手を引いて扉の前から移動していた。直後に。

最初予想していた通り門がアッサリとへし折れ、轟音と共に扉がま

るで紙屑の如く吹っ飛ぶ。

吹っ飛んだ扉は勢い良く反対側の壁にぶつかり、どっという衝撃力だかその壁までブチ抜いた。

…そうして開いた扉から、ヌッとウタゴンが現れる。

「フフフフフ…隠れた所で無駄だぞ…!!この私から、は、…ゼエゼエ…逃げ、られんのだ…!!ゼエゼエ…」

「……………(ウゼエ…)…さいですか…」

「…さあ私と戦え!!戦うのだツ!!」

叫び、ついでにウタゴンは隣の壁を殴った。…肩で息してる割に元気だなオイ。李花は心の中で小さくツツコんだ。

ちやちな木製の小屋である　当然、ボゴツという音と共に、ウタゴンの拳型に壁に穴が開く。

…オイオイ、このままじゃあ…。

思った李花は、隣の敬矢をつついた。

「な…何ですか…?」

「ヤバイって。あのアザラシ男が暴れたら、此処簡単に崩れるっての。一度、また逃げなきゃ」

「あ…そ、そうですね…」

「同じ手はもう通用しないっしょ…多分。っー事は…」

言いながら李花は敬矢の手を取り、ジリッと一歩後ろに下がった。

後ろには、扉がぶつかったおかげで大きく開いた穴。…そう、あそこから。

「普通に逃げろっ!!」

言うが早いか、李花は全速力で駆け出した。

そう、別にすぐ追

いつかれる分には構わない。

今にも崩れそうなこの小屋から出られれば、それでいい。実に簡単な事である。時速25・6キロメートルで走れる李花ならば、5メートル四方の小屋くらい1秒未満で飛び出せる。

しかし、だった。

何と小屋から飛び出したすぐ先には、呆然とした表情をしたチビ共が3、4人。

…昼に、李花が川原で出逢った子ども達だった。しまった巻き込んだ　李花は舌打ちする。

「また逃げる気があーー！！そうはいかんぞおおお！！」

大声を上げながら、続いて飛び出してくるウタゴン。子ども達の目は更に丸くなった。

ウタゴンの目も、子ども達に向けられる。

…マズいぞ、これは。

思った時には　李花はとつと行動に出ていた。

「逃げるチビ共ッ！！」

叫ぶと同時に、ウタゴンの腹にミドルキック。

ウタゴンの堅い堅い腹筋の前にそれはほぼ無意味だったが、突然の不意打ちに一瞬ウタゴンは足を止めた。

李花の声とその行動に、チビ達はようやく我にかえった様だった。慌てた様子で悲鳴を上げ、散り散りに走って逃げ出し始める。これでよし。…と思ったのも束の間。

「……李花さんッ！！」

敬矢の声がした。

思いつきり後ろに引つ張られる感覚。

と同時に、何か堅いモノが額を掠めて過ぎるのが解った。引つ張ったのが敬矢であると解ったのが、1秒後。更に1秒後、目が振り切られたウタゴンの腕を捉える。

ああ、あの堅いのアンタの手のツメか…。

で、ケーヤの判断が一瞬でも遅けりゃ私は死んでた訳。うわあ。

なんて考えていると、何やらタラリと温かいものが顔を流れる。何じゃこりゃ、と李花は額に手をやった。

…あらら、手が赤く染まつちゃったわ。

「り…李花さ…っ」

敬矢の顔が見る見る内に真っ青になっていく。

そう、李花には見えなかつたし、上手い事インドルフィンでも働いていてくれたのか大して痛くもなかつたのだが。実際、李花の左側額はウタゴンのツメが掠った所為で2、3センチ程裂け、真っ赤な血がダラダラと流れていたのだ。

「…何…ケーヤ、私の顔、そんなに今変？」

「……………っ」

後日談によると。

確かに敬矢はこの時、自分の中で「何か」がキレる音を聞いたという。

けれどとにかくこの時は。唐突に。

「っ李花さんに、何するんだー！っ！…！」

…敬矢が叫んで。

ウタゴンが、紙屑の様に宙を舞った。

「…おい、ケーヤ？」

すっかり沈みかけている夕日を背に、李花は敬矢に歩み寄った。チラツと腕時計に目を落とすと、もう5時を過ぎていて。ボンヤリしていたらしい敬矢は慌てて振り返り、「は、はいつ!!」と大きく返事をした。

「アレ、どーなる訳？」

李花は4、5メートル向こうに倒れているウタゴンを指差した。想像だと、IHOだったかの連中がやってきて片付けているのだが。しかし敬矢が答えたのは、何とも意外な事実で。

「あ、あの…異星人の体は、倒されると数十分で消滅してしまうらしいんです…詳細は解らないんですけど…」

「…そうなの？都合いいねえ」

ケラツと明るく笑う。李花の額には、何故か敬矢が持っていた大きな目の絆創膏が貼ってある。

川を渡ってきた少し冷たい風が、二人の周りに生える草を揺らした。

あの瞬間、敬矢が右拳を振り上げてウタゴンの顔面を殴り飛ばした。

…やっぱり無茶苦茶強いじゃん。

李花は思い、やはり自分は正しかったと確信する。

座り込んでいる敬矢に手を伸ばし、立つのを促した。おずおずとその手を取り、立ち上がる敬矢。目が合うと、李花は笑った。

「カツコよかったよ、ヒーロー」

「出席取るぞー」

担任である現国教師（28歳・独身）がそう言いながら教室に入ってきた。

噂話や昨日のテレビの話など、思い思いの会話でザワついていた教室が少しだけ静かになる。

生徒達がバタバタと席に着くのを確認して、教師は教卓についた。

「お前らな、俺が来る前に席着いとけよ。騒がしいだろ毎朝毎朝」

「えー、いーじゃないですかセンセー」

「そーですよ、それより早く出席取っちゃいませよーよー」

早く早くー、と生徒達が急かす。

全く…と息を吐き、教師は出席簿を開いた。

「男子一番、朱島敬矢」

彼の席は、いつもの様に空席。
しかし今日　この日は。

ガラッ。

「……は、はい……」

黒縁眼鏡。その奥のいかにも気の弱そうな目が、落ち着きなくキョロキョロしている。

ヒョロリと高い身長で、中途半端に開いた扉の前に縮こまって。

クラス全員の目が、驚きに満ちて彼を見つめていた。

「校長室に寄っていて、遅れてしまいました…す、すみません…っ
「い、いや…」

教師も呆然としている。

そついや今朝の職員会議で何か言っていた様な…半分寝ていたから覚えていない訳ではあるが…。

思考が纏まらない教師を尻目に、彼はとにかく不安そうにクラス中を見回して。

…只一人を見つけ、ほっと安心した様に肩を下ろす。

「オハヨウ、ケーヤ」

教室の空気にそぐわない、明るい声。

クラスメート全員が振り返った。

皆の視線の先。

学校一の美少女である李花が微笑んで

敬矢に手を振っていた。

お昼休み、普通なら生徒は立ち入り禁止になっている屋上にて。李花と敬矢の二人は、まったりとお昼ご飯を食べていた。

「今日からガツコか。ま、ゆっくり慣れてくとイイよ」

「そ、そうですね…皆と、仲良く出来ると…いいんですけど…」

「んー…まーね…」

今日の李花の弁当はサンドイッチ。タマゴサンドを選んで、パクツと齧りつく。

「くれぐれも、体育とかで世界記録出さないよーにしなよ？」

「…だ、大丈夫です。セーブ、ききますから」

「そりゃ便利。NASAと共同開発っていうのも伊達じゃないんだ」

「みたい、ですね…」

「うん」

ほのぼのとした空間。

何だか随分と心地よくて、李花はつい頬が緩むのを感じた。

それは敬矢も同じなのか　今朝、教室に入ってきた時とは比べ物にならない程穏やかな表情。

…何とはなしに、敬矢の母の言葉を思い出す。

”敬矢には、貴方みたいな方が必要なんです”

そういえばアレは結局、どういう意味だったのか。

癒し系、には程遠い自分。一体？

横目に敬矢を見る。

敬矢もそれに気付いてこっちを見、緩く首を傾げてきた。

李花は肩を竦め、何でもないと言首を振る。

どうでもいいか、そんな事は。

取り敢えず、今はこの和める一時が一番大事。小難しい事考えるのはナシにしよう。

そう思つて、李花は空を見上げた。
が…。

5秒後。

ビーーーーーッ

「?!?!?!」

「…ケーヤ…何さ、その腕時計から出てる妙な音は…」

「え、あ、コレは…」

『敬矢あー！東京タワーに異星人が出たぞおーッ！』

「はっ…今の声、誠豪サン?!」

「い、行かないと…ッ」

「……あー、行くわ私も」

「えっ、でも…」

「いーから。ホラ、行くよっ」

全く、平穩な日はいつ来るのやら。

戦いの為に費やした時間は、いつか返してくれるのかね？

…そんな時間も、実は割と楽しいからいいんだけどね。

なんて不謹慎な事を考えながら、李花は敬矢の手を握った。

荷物片付けは取り敢えず後回しにして、その7秒台をコンスタントに走れる足で屋上の階段を駆け下りる。

学校から出た途端に、新しい空気が二人を包んだ。

春は、これからが本番だ。

色んな意味で。

e n d

(後書き)

何ともハチャメチャなお話で申し訳ありません…。

4年程前に執筆したものに、少しずつ少しずつ手を加えて完成した
ものです。

最後まで読んで頂き、本当に有難う御座いました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5103f/>

HERO'S HERO

2010年12月2日02時47分発行